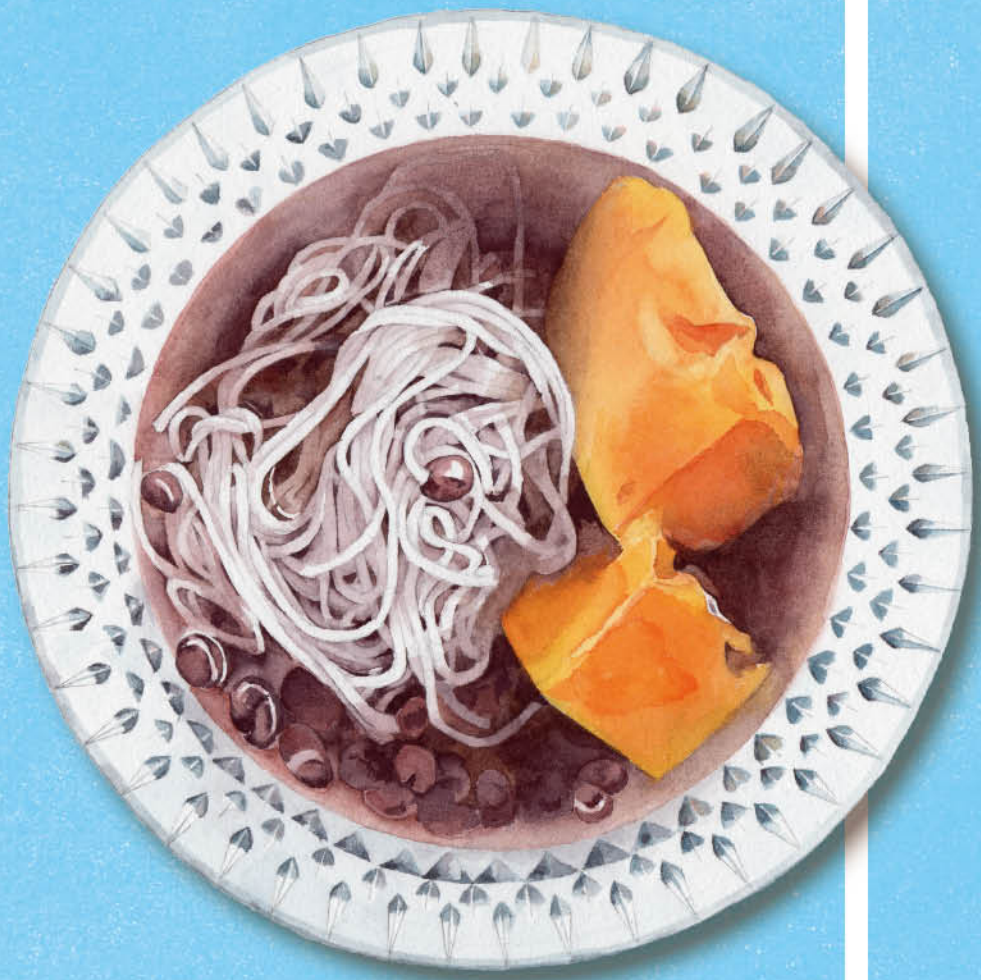
FUEKI vol.68



公益財団法人 福武教育文化振興財団 機関誌「不易」

地道な活動、幅広い取り組みに光を当てる

2018年度の福武教育文化賞の表彰式が11月16日、JunkoFukutakeHallで行われ、教育賞には1個人3団体、文化賞には4個人が選ばれた。

福武哲彦教育賞

特定非営利活動法人 ハート・オブ・ゴールド

代表理事 **有森裕子** ありもりゆうこ

1998年の設立当時から国際理解教育の実践の場として、岡山県内の小・中・高校さらには大学に協力し、異文化理解・グローバル人材の育成に長年携わってきた。全国的にも名高い団体でありながら、地元岡山でも様々な活動を継続して繰り広げる姿が高く評価された。

1996年アトランタオリンピックが終わってすぐに誘われたのが、第一回アンコールワット国際ハーフマラソン。地雷廃絶と被害者支援の目的で、チャリティーマラソンを開催するので、今度は人のために走って欲しいと声をかけられ参加したことが、この法人設立のきっかけとなりました。

20年前は、スポーツを通した開発活動は、世界的にもほとんど関心が持たれていませんでした。また、カンボジアもスポーツ・体育教育どころではなく、毎年、マラソンや青少年スポーツ大会を継続することで、子ども達に、スポーツマンシップ、フェアープレイ、協力する楽しみ、がんばる心などが育まれることが見えてきて、カンボジア教育省の人々が体育科教育の実施を強く願うようになりました。

活動を行う中で困難なことに直面することも多々あり、その時は毎回相手と向き合って、とことん話し合いました。コミュニケーションを大事に、決して諦めないで続けたことが、人を変え、自分を変えていったように思います。そして何よりも、現地の子どもや人々の「生きる力と成長」を感じられたこと、また当法人の活動で支援してもらう人も支援する人も、共に成長できていると感じられることが支えとなりました。

私自身、オリンピックのメダルを取った時よりも、この活動ができ、ここまで続けてこられたことが何より幸せだと感じています。

私の好きな言葉は「すべてを力に」。スポーツを通して、人々の心身の健康を育み、希望を持って起き上がるチャンスを持てる活動を今後も広げていきたいです。

福武文化賞

能勢 伊勢雄 のせいせお

LiveHousePEPPERLAND
主宰・写真家・美術展企画

1974年から活動するLiveHouse PEPPERLAND』は岡山に「ライブ文化」とロールモデルを定着させた。活躍のフィールドは、写真・音楽・映画・美術など多岐にわたり、数々の展覧会や著書を手掛けている。常に時代の変化や社会課題に感応し自らの表現を専門深耕してきた姿勢は若者たちに大きな刺激を与え続けている。

当時10歳の私は「写真を撮りたい」と父親に気持ちを伝え、近所の知人から山﨑治雄氏を紹介され購入してもらったカメラを手に、足しげく山﨑邸に通い、写真技術以外にも多くのことがらを学びました。それは、緑川洋一氏や中村昭夫氏が指導を受けに来ていた時代。「能勢君、写真を撮るには本を読まんとおえんよ」と山﨑氏に言われた言葉が、後に松岡正剛氏と親交を結ぶことにもつながり、今日の自己形成につながったと思います。

高校卒業後は「大阪シナリオ学校」に進み、映画や映像を勉強する中、ロナルド・ナメス監督作品『ウオーホルE.P.I』(1967)に遭遇し、自分がやりたいことは「これだ!!」と。あらゆる文化領域がミックスされる場、ミュージシャン、アーティスト等も自由に出入りする「PEPPERLAND」を1974年にスタート。そして、自らも映像、写真、文筆、美術展などの領域を跨いだ表現を実践してきました。文化領域を固定化しないことにより、その時代、時代において常に導いてくれるビジョンと展望が開けて、たとえ未完成であっても、誕生したばかりの音楽表現は「次の時代を映し出す鏡」であり、恩寵であり支えでした。その音楽はいつの時代にも総べての文化より先行していました。

ゲーテの言葉「感覚は間違わない、間違うのは判断だ」を座右の銘として、「時代を超えて意味を失わない表現とはなにか?」を常に考えながら作品と向き合っています。これからも体験してきたことを若い世代に伝えていきたいと思います。

谷口澄夫教育奨励賞

清板 芳子 せいたよしこ

ノートルダム清心女子大学　名誉教授
三宅医院　心理臨床室　部長

臨床心理学等を専門に、大学で長年教鞭をとってきた。なかでも岡山県が取組む子ども電話・メール相談の「子どもほっとライン事業」では相談員の資質向上と体制整備に尽力し、青少年の健全育成に与えた影響は大きく、今後一層の活躍が期待される。

私がやってきたことは大きく二つ。一つは、大学教員としての立場を持つ傍らで、大学に外来相談室を持ち、そこで長年、来談されるクライエントに対して精神分析的な精神療法を手法とした面接を続けてきたこと。もう一つは、保健師、臨床心理士など面接を手法とする現場の専門家たちのスーパーバイザー的役割を行ってきたこと、といえます。

きっかけとなったのは、何といっても、大学院院生のとき「精神科医療における精神療法においては医師免許を持った医師には見えなくなるものがあり、それを行う非医師の治療者が必要」と唱える、土居健郎という精神分析医の師に出会い、彼のもとで「精神分析的面接法」を身に着けたことです。

飛び込んだ精神医療現場では、心理専門家には責任ある仕事を任せてはもらえない、という現実にも出会いました。しかしその後、大学教員時代の外来相談室活動の中で、心の不調を抱えた人に対する〝治療的な〟アプローチや、病気を抱えた人にとって少し敷居の高い医療へのやんわりとしたつなぎ役という役どころがある、ということを痛感したのです。

心理臨床の専門家は、いまでもどちらかといえば社会的には目立たない存在です。やはり誰にとっても「自分」の心の一番の専門家は「自分」だからではないでしょうか。

私の好きな言葉は、下村湖人の次郎物語に出てくる「白鳥入蘆花」。真っ白な葦原に白鳥が舞い降りても鳥の姿は見えない。でも鳥の降り立ったところに向かって葦はなびいていく、というわけです。この後も自分らしいスタンスで、与えられた役割を果たしていきたいです。

谷口澄夫教育奨励賞

特定非営利活動法人　元気ッズ
理事長　谷口香里（たにぐちかおり）

鏡野町で子育て支援センターを管理運営し、子育て中の親同士のネットワークづくりや、保護者主催イベントのサポートを行うなど、町内のみならず、美作地域全体で子育て支援に取り組む基盤づくりに大きく貢献し、今後更なる活動の発展が期待される。

2004年に、子育てを応援したい有志7人が集まって活動を始めた『元気ッズ』。「心も身体も元気なキッズ（子どもたち）になるように」との願いを込めてつけた名前です。当時の目標は「鏡野町に子育て支援センターを作ろう」というものでした。

初めの頃は活動に必要な物資が何も無く、メンバー持ち寄りのおもちゃやマットを各自が車に満載し、場所も点々としながらのジプシー状態。それでも遊びに来て喜んでくれる子ども達やお母さん達の笑顔に支えられ、手伝ってくれる人たちも増えていき、徐々に活動を充実させていきました。

2008年にNPO法人となり、鏡野町子育て支援センターの指定管理を受託することで、長年欲しかった「親子が自由に交流できる場所」が出来ました。

元気ッズではその他にも、保護者の学ぶ機会を確保するための【託児事業】。頼れる人がなく困っている人の最後の砦【一時預かり事業】。積極的に子育てについて話合う時間を提供する【親育ち応援学習プログラム】。今の子育て世代に欠かすことのできないSNSやホームページを使っての【子育て情報発信事業】。子どもや子育てへの理解を広め、子育て支援者を増やすための【養成事業】などを行っています。

これらの様々な事業を通して、パパ・ママたちが「子どもって可愛い。子育てって楽しい」と感じられて、孤独感なくいつでも支え合える子育て環境を目指して、これからもご支援いただきながら頑張っていきたいと思います。

谷口澄夫教育奨励賞

特定非営利活動法人　未来へ
理事長　藤本優（ふじもとまさる）

児童福祉施設等で暮らす子供たちのサポートや、虐待や貧困、いじめなど様々な理由でニートや引きこもりになった若者に対する社会的自立支援事業を行っている。各組織と連携し、地域を巻き込み活動する姿は素晴らしく、今後一層の活躍が期待される。

食料が余っているのに飢え死にする子どもたちがいる。7人に一人の子どもが貧困状態にあるという。虐待、育児放棄、いじめによる自殺。なぜ罪のない子どもたちが苦しむのか？ なぜ命を落とすのか？ 苦しんでいる子どもたちの為に自分に何が出来るか？

2011年、県北の3つの児童養護施設の存在を知り仲間と募金活動を始め、翌年に卒園児童へお祝い金を届けました。それが私たちの活動の始まりです。

NPO法人未来への支援は、自分たちが生活する地域にいるすべての子どもと若者が対象です。そして彼らにどんな事情があろうと、どんな環境にいようと、差別を受けず、必要に応じた支援が受けられ、将来に夢がもてる社会の実現をめざしています。

今年、私たちは560の夢プロジェクト実行委員会を設立しました。メンバーは県下の社会的養護や子どもに関わる団体と地元の大学生などです。現在岡山県には13の児童養護施設があり、施設と里親のもとで約560人の子どもたちが生活しています。そのほとんどが虐待や育児放棄などから保護され、更に病気やさまざまな困難を二重三重に抱えているのです。自分を取り巻く環境から進学を諦めたり、それどころか将来の夢を初めから持とうとしない子も多くいます。このプロジェクトでは年間を通じたイベントや進学助成などを予定しており、参加してくれた子どもたちが「自分は一人ぼっちではなく、未来に夢を持つことができる」と実感してくれることを期待しています。

今後も一人でも多くの方に、すぐそばにいる社会的養護のもとで生きている子どもたちのことを知っていただき、応援していただけるよう活動を広げていきたいです。

福武文化奨励賞

上田恭嗣（うえだやすつぐ）
ノートルダム清心女子大学　教授

倉敷美観地区を特徴づけている近代建築群の建築的評価、建築に至る歴史的経緯等に関する研究を30年以上にわたり行う。特に大原孫三郎から絶大なる信頼を受けた郷土の建築家・薬師寺主計の知られざる建築経緯とその建築的価値を明らかにしたことは、岡山県の建築文化の宝物となり、建築を通した地域の活性化も期待される。

両親の実家が奈良であったことから、幼少期から奈良にあった寺まわりが好きな子どもでした。父親が国有林の仕事をしていた関係で、家には木に関する書物が多くあり、なんとなく木にも関心を持っていました。奈良で一人で見て回ったお寺の凛とした木の造り、美しい庭、大きな広い空間が好きでした。

大学院では病院建築を専門としていましたが、岡山では継続できず建築の歴史に専門領域を変えました。近代建築に興味を持ち始めたのは、薬師寺主計が設計した中國銀行旧本店との出会いでした。ドイツ風のいかつい人をよせつけない外観、中に入るとアール・デコ様式の美しい建築デザインで、日本では類を見ない貴重な建物でした。当時は、建築の価値について説明できる人もなく、岡山では関心を持つ人が少ない時代でした。昭和の終わりに、中國銀行旧本店が解体されることを耳にして、薬師寺主計の研究を本格的に始めました。調べてみると、岡山県総社市出身で、東京帝国大学を卒業し、先見性のある時代離れした感性と表現力、そして素晴らしい才覚を持った郷土の建築家であることが判ってきました。しかし、戦争という時代の中で、戦後の日本の建築界に於いて、ほとんど評価されずに消えてしまった人物です。彼の生き方にも魅了され現在も調べています。

今後は、薬師寺主計の思想、戦後の倉敷のまちづくりに関与した弟子ともいえる浦辺鎮太郎の建築について調べる予定です。若い人たちにも、誰も知らなかったことを解き明かす歴史の楽しさを伝えたいものです。

福武文化奨励賞

梅村知世 うめむらともよ

ピアニスト

ロベルト・シューマン国際コンクール（ドイツ）にて最高位を受賞するなど輝かしい成績を収め、「彩り豊かで歌うような音色」「メッセージ性の高い音楽家」として国内外で高い評価を得ている岡山が誇るピアニスト。岡山県内でも演奏会を行うなど音楽普及活動も活発に展開している。

音楽と出会ったのは4歳の頃。最初はただただ音楽が好きで習い事の一つとして始めましたが、いつの間にか常に身近にある存在で人生において必要不可欠なものとなっていました。ピアニストになる決心をしたのは中学生の頃、音楽やピアノを深く学び共に歩んでいきたいと気づいたからです。周りの方は温かく見守っていてくれましたが、自分の中で大きな覚悟が必要でした。

満足のいく演奏ができないことが続いた時や結果が伴わない時は、本質的なことを見失う時期もありました。その際はその都度立ち止まり試行錯誤することで、新たなステップにつなげるきっかけとなりました。演奏面や音楽面での大きな変革には膨大な時間がかかりますが、音楽は一生かけて学ぶものと改めて感じています。これまでピアノを続けられたのは、家族や先生方や友人の支え、そしてやはり演奏会の際にお客様からいただく温かいお言葉には心から感謝しており、私の音楽を奏でるエネルギー源となっています。

クラシック音楽の魅力は、数百年前に残された作品から作曲家の声を聴くことができ、またその音楽を通して人々に感動を与えることができることだと思います。魅力を伝えるためには、演奏だけではなく音楽に関する知識・感覚等も深めていきたいです。音楽は様々な歴史的背景や絵や小説からもとに作られているため、それらをできるだけ学び音楽につなげていきたいと思っています。

好きな言葉は、一期一会。音楽との出会い、作曲家や作品との出会い、舞台上で奏でる音との出会い、そして何より人との出会いやつながり…大小様々ですが、その一瞬一瞬に出会う意味がそれぞれに有り、それらをいつも大切に積み重ねていきたいと思っています。

福武文化奨励賞

野村昌子 のむらまさこ

バルーンアーティスト

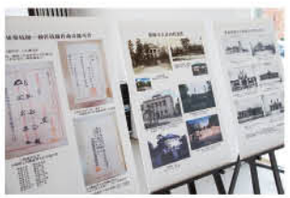
高い技術と表現力の高さで国内外のバルーンアートの大会で数々の栄冠を獲得。アメリカで行われた世界大会（World Balloon Convention）の最高賞「マスターデザイナー」を日本人初で受賞。地元真庭でもバルーンアートを通して地域の活性化に努めている。

幼い頃からモノを作ることが大好きな少女でした。絵を描くことも大好きでしたが、その中でも、色がついているものを組み立てていく立体が、自分にぴったり合ってきました。

子どもの頃、テレビで見たバルーンアートが忘れられず、短大卒業後にエミリーズバルーンアートビジネススクールを受講。その翌年にはコンテストに出場していました。初めて出場したコンテスト（2000年ノンフレームオブジェ部門）で優勝できたことは、嬉しかった反面とても驚きました。4人チームで出場する大会だったのですが、ひとりで出場するという無謀なことをしてましたし。今思うと、「こうしなければいけない」という感覚や固定概念がなかったのがよかったのかもしれません。

モチベーションはコンテストです。新しいことに挑戦ができる場、夢をひろげる場、自分の表現ができる場だと思っています。10年前には気づかなかった作り方が、ポンと気がつく瞬間があります。そこに目を向けられるかどうか、気がつくかどうかが大事だと最近思うようになってきました。固定概念や先入観で可能性を決めるのではなく、初心に戻って、自分が納得いくまで「やってみる」を大切にしていきたいと思います。

これからも見る人を笑顔にするため、更に技術を磨き、アート性を高めていきたいと思います。



福武コレクション ものがたり

エピソード3 ー直島と国吉康雄ー

1.

国吉康雄の絵が展示されてる！ ずいぶん明るい展示室ですね。向こうに見えるのは、瀬戸内海？

そう、ここは香川県直島のベネッセハウスミュージアム。2013年、「ベネッセアートサイト直島の原点 国吉康雄展」で、全館を使って福武コレクションの国吉作品を展示したんだよ。

福武總一郎（ベネッセホールディングス名誉顧問）

Photo : Tadasu Yamamoto

2.

直島って現代アートで有名な島ですよね。国吉康雄と現代アートって、なんだか結びつかないけど・・・。

Yayoi Kusama " Pumpkin "　Photo: Shigeo Anzai

国吉康雄の作品には強いメッセージ性があります。彼は厳しい時代と環境の中で人生を切り開きました。その中で何を感じ、伝えようとしたのか。そして私たちは自分の時代をどう生きるべきなのか。彼の絵を見ていると、様々なことを考えてしまう。

絵を見て何を感じるかは見る人によって違います。アートは一人一人にメッセージを投げかけ、考えさせる。私は国吉の絵を見ているうちに、そのことに気づきました。

いま、直島の穏やかな自然の中で現代アートや建築に触れると、誰でも、いつもとは違った目で時代や社会を振り返り、考えてしまうでしょう？ 私はそういう場所を作りたかったんです。考えさせる力、メッセージ性という点で、国吉康雄は直島のアート活動の原点なのです。

3.

国吉康雄の絵を見ながらみんなで対話しているところね。この鑑賞方法、私も参加したことあるけど、自分が見たものを言葉にしたり、他の人が何を考えたかを聞くのってすごく楽しかった。答えは一つじゃないんだな、自分が考えたことに自信をもっていいんだな、って思ったよ。

Photo : Kenji Kotani

ここ数年、岡山大学国吉康雄講座の企画により、岡山はもちろん、横浜、和歌山、栃木でも国吉展が開かれ、福武コレクションの作品が紹介されているよ。

こういった、対話・探求型の鑑賞方法の研究や国吉康雄自身の人生と作品の研究、アートを使った地域創生を行なっていくために、2015年、岡山大学教育学部に寄付講座「国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座」が設置されたんだ。

岡山での「国吉祭」には私も企画に参加したよ！

楽しみ～！

次は何かな？

2019年1月5日～2月3日
宇城市不知火美術館（熊本県）
「国吉康雄と野田英夫」展

2019年1月8日～3月24日
熊本県立美術館
「藤田嗣治と国吉康雄」展

2019年4月20日～5月19日
岡山シティミュージアム
国吉康雄生誕130周年記念展（仮）

協力：
岡山大学国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座
一般社団法人クニヨシパートナーズ
株式会社 ベネッセホールディングス

参考文献：
「ベネッセアートサイト直島の原点―国吉康雄展」報告書
（公益財団法人 福武財団、2013年）

応援してます！

地域課題の解決に向け、岡山県の教育と文化による人づくり・地域づくりに取り組む方々を応援する「福武教育文化活動助成」。今年度の助成対象に決定した127団体（個人）の教育文化活動のうち、3ヵ年継続助成に決定した団体の活動をご紹介します。

きらぼし★アート展実行委員会

阪本文雄さん

設立
2016年12月1日
主な活動場所
岡山市内

岡山県内の障害者の芸術作品を紹介する全県公募展「きらぼし★アート展」を2017年から開催。美術の専門教育を受けていない人たちの作品を「アール・ブリュット（生の芸術）」として評価する動きが広がる中、障害者が内に秘めた才能や可能性に光を当て、新たな作家たちの発掘を目指します。また、創作活動を支える施設職員らを対象に、他県の障害者芸術文化支援の先進事例を学ぶセミナーも開催。学びと交流の場を作り、全県的なネットワーク構築に役立てます。

巨瀬学園CS推進チーム

西村肇さん

設立
2017年4月1日
主な活動場所
高梁市立巨瀬小学校

2017年4月に、高梁市で最初の学校運営協議会の設置を目指して、学校評議員会を母体とした学校運営協議会準備会を立ち上げました。学校運営協議会準備会委員と教職員が合同研修を行う中で、子供を中心に据え、地域と学校が願いや課題を共有していきました。結果、2018年1月に、少子高齢化する巨瀬地域と巨瀬学園が共に活性化するために、地域総出で地域の子供を育てていく仕組み「学校運営協議会」を設置。地域と連携・協働し、輝く巨瀬地区になるよう活動していきます。

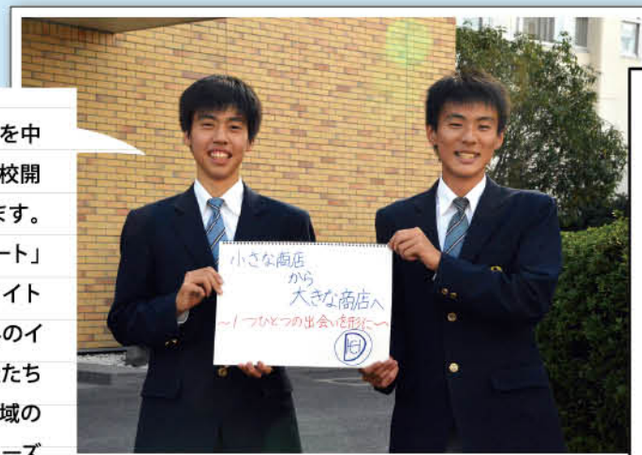
インターナショナル・シェアハウス・照ラス

姜侖秀さん

世界の若者やアーティストを地域に繋げる田舎の多国籍シェアハウス。2016年8月のオープン以来、フランスやアルゼンチンなど、世界各国の若者やアーティストが滞在しながら地域のプロジェクトに関わっています。2018年度は3カ国の舞台芸術家を招き、住民と共に作品作りを経験する「ストーリーテラー・イン・レジデンス」プログラムを実施中。その一環として、ギリシャ人の演出家がギリシャ神話「オデュッセイア」を元に、住民とのワークショップを行って発表会を実施しました。

設立
2016年8月1日
主な活動場所
真庭市北房地区

東商デパート「サテライト店」



山川聖貴さん・田邊綾悟さん

設立
2017年4月1日
主な活動場所
表町商店街

岡山市内で開催されるイベントを中心に出店し、復興支援商品や本校開発商品の販売活動を行っています。伝統ある学校行事の「東商デパート」をPRする活動として「サテライト店」を運営。大学の学園祭や市外のイベントにも出店しています。生徒たちはお客様との会話を通じて、地域の方々の温かさにふれ、顧客のニーズを知ることができます。全校生徒で取組む「東商デパート」成功のためのヒントをこの活動から学んでいます。

FACE

うのずくり実行委員会　委員長

森美樹さん

移住をしようと思った時点ですでにクリエイティブ

うのずくり―うのに住んで＋つくる―は岡山県玉野市宇野築港界隈を楽しく暮らす街にすることを目的に、クリエイターを国内・海外から呼び込もうとする「移住プロジェクト」です。これまでに53組104人のお世話をしてきた森美樹さんにお話しをお伺いしました。

―なぜ移住者支援をはじめようと思ったのですか

玉野という街は、年々空き家が増えていて、空き家になれば人も減る。人が減れば空き家もそのまま。マイナスの連鎖ですね。やっぱり自分の住んでいる街が、雰囲気が良くて楽しいほうが嬉しいし、何かできることがあれば、と移住プロジェクトのお手伝いをすることになりました。

―活動をされていて苦労したこと、楽しかったことはありますか

人と人との間に入ることが多いのでその人の思いをどう生かしていくかが難しいですね。移住者と地域の方、また関わる人など双方の要望意見を聞き、お互い歩み寄りながらおとしどころを見つけていく、ということの繰り返しです。私は移住者の立場でもありますから、ちょうど中間的存在でもいられます。何かしたいと移住を考えつつも、バックグラウンドが無い人に玉野を選んでもらえるようにしたいです。私は、移住をしようと思った時点ですでにクリエイティブだと思っています。自分がこれからどこでどのようにの過ごし方を、生活も含めて自分の時間の使い方など、すべていちから見つめ直し向かい合うじゃないですか。だから、クリエイターに限らず相談に来られたらすべて対応しています。そのお手伝いができるのはとても楽しいですね。活動をはじめて7年半ですが、少しずつまわりが楽しくなり、身近にわくわくが共有できる人が増えていっているのは嬉しいです。

―これからの展望を教えてください

地域の人たちに対するアプローチをより深めていきたいです。まだまだ移住希望者の数に対して紹介できる住める空き家が少ないんですね。地域の人が移住者を受けいれるマインドを育たないと、活動が停滞してしまいます。空き家は少しでも早く利用を促し、気がついたときにできることから進めていくことが大切です。そうならないために、今年度は空き家のペンキ塗りや床貼りなど手を動かしながら、空き家の活用を考えるDIYの実践的な「ずくりワークショップ」を行い、玉野市内の空き家を活用し減らすための手助けになればと思っています。良い土と空気と水があればすくすくと植物が育つように、良い環境であればしぜんと人ものびのびとクリエイティブにいられるように信じています。

地域の人たちも移住者も、住んでいるみんなが楽しく健やかに、いられる地でありたいと思います。

森美樹／うのずくり実行委員長・ガラス工芸作家

広島県出身。岡山県・倉敷芸術科学大学でガラス工芸を学んだ後、アトリエとして玉野市・宇野駅東の共同アトリエ「駅東創庫」に出会い、2007年に玉野市へ移住。現在は、宇野港西の「TONOI」にて、創作活動を行う。半分地元民、半分ヨソ者の立場で、まちづくりに携わる。写真家集団Phenomenaに参加し、昨年、写真集『フトマニクシロ・ランドスケープ 建国の原像を問う』（水声社）を出版。

うのずくり　http://www.unozukuri.com/

---

vol.4　2018.12.1.　玉野市産業振興ビル

andF教室レポート

「地域で活動を続けるヒケツを探ろう！」

andF教室で印象に残った言葉は？

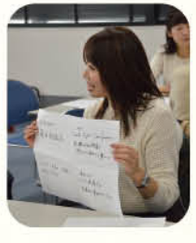
新しい仲間をどうやってみつける？活動を継続・発展させていくためにはどのようにしたらいいの？

―続く活動にするために必要なものは何かを考えました。

講師：石原達也さん

1977年岡山市生まれ。2001年大学生のみのNPO法人設立に参画したことからNPO業界に。活動を続ける中で支援者を志すようになり2003年鳥取市社会福祉協議会に入職。出身地・岡山でNPO法人岡山NPOセンター事務局長に就任（現在、代表理事）。その他、公益財団法人みんなでつくる財団おかやま（理事）、NPO法人みんなの集落研究所（代表執行役）、一般社団法人全国コミュニティ財団協会（理事／事務局長）等の設立に関わる。

- 「会議は楽しくあるべき。それが継続一助となる」
- 「活動は事務の堆積」
- 「目標は目的達成に向け積み上げるもの」
- 「活動は借り物共創。資源はまず、頼む、巻き込むことで、用意できないかを考える」
- 「中心者にしなやかな覚悟がある」
- 「作業をせずに仕事をせよ」
- 「目標を共有することが大切」



題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

犬島・昔ながらの「南京ぜんざい」

2008年4月。福武財団の犬島精錬所美術館カフェに入社した当初、「犬島の昔ながらの食べものをメニューにしたい」と言われました。犬島ではお米が作れなかったので、麦類・豆類・芋類・カボチャなどを〝お腹を満たす食材〟として多く作っていました。その中で私が好んで食べていたのが、南京ぜんざいです。夏は冷やして、冬は温かく煮て、年中食べていました。

ぜんざいの中身は、小豆・カボチャ・そうめんですが、そうめんだけは別に煮て、食べるときに入れて作ります。その昔、香川県からお嫁さんが来るなど行き来があったので、特産の小豆島そうめんが使われるようになったのだと思います。カボチャは、その甘味で砂糖が少なくても作れると考えたのでしょう。

ぜんざいは、小豆の煮方がコツです。小豆は、一度沸騰した煮汁を捨てて、弱火で豆をお出らせないようにゆっくり煮ることを、母から教えて貰いました。文字通り、おふくろの味です。昭和20年ごろは、食べ物がない時代で、ぜんざいはご馳走でした。

素朴な味ですが、ぜひ一度味わいに犬島にいらしてください。

池田栄
IKEDA sakae
1943年岡山市東区犬島生まれ、犬島育ち。公益財団法人福武財団犬島部門勤務。

犬島（岡山市東区犬島）
犬島は岡山市内唯一の有人離島。人口49人（2016年9月30日現在）。古くから銅の製錬業と採石業などで隆盛をきわめてきた歴史があり、現在も残る当時の遺構が独特の雰囲気と景観を醸し出している。また、2008年の犬島精錬所美術館開館、2010年の瀬戸内国際芸術祭以降は、現代アートの島としても知られるようになっている。

犬島精錬所美術館　http://benesse-artsite.jp/art/seirensho.html

■東京の真ん中の公立中学校長が、「宿題なし、定期テストなし、固定担任制なし」と今までの「常識」をくつがえし、大胆な「学校改革」を行い、全国から注目を浴びています。「何のために学校があるのか。子ども達が社会の中で生きていくためです。学習指導要項をこなすためや、暗記してテストでよい点を取るために学校があるわけではない」と言い切ります。そして、主体的に学ぶ意欲を尊重し、自己管理出来るプログラムを導入したり、地域の大人たちと交流し、生徒自身が企画提案するような取組みが実践されています。■こんな中学校行きたかったと思うのは私だけでしょうか？「公立学校でも改革しようと思えば出来ることは多い」と教師は勿論、生徒や保護者も一体となった活動のようです。人工知能（AI）等の技術革新で、一気に従来型の仕事は存在しなくなると言われますが、20世紀型の知識偏重教育で立ち向かえるはずはありません。この中学校は、このような社会が到来しても変化に対応できる力を持つ人材を育てていると思います。■瀬戸内国際芸術祭2019は、4月26日から開催です。島に渡り、アートに触れる芸術祭は、従来の価値観から離れ、じっくりと考える良い機会となるでしょう。作品鑑賞パスポートは好評前売り中ですが、15歳までは無料。サポーター「こえび隊」に参加して違う角度から見てみるのもいかがでしょうか。いずれにしても、変化に対応できる力が身につくと思います（O）

人づくり、地域づくりを応援します
公益財団法人 福武教育文化振興財団
FUKUTAKE EDUCATION AND CULTURE FOUNDATION

〒700-0807　岡山県岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3階
TEL：086-221-5254　FAX：086-232-3190
URL：http://www.fukutake.or.jp/ec/
E-MAIL：eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 不易 FUEKI vol.68 2019.1.25
編集・発行：
公益財団法人福武教育文化振興財団
制作：株式会社吉備人
デザイン・イラスト：タケシマレイコ
印刷：株式会社三門印刷所